

自殺癖

横山翔



そもそも知らない男と寝ることの何がいけないのでしょうか。

わたしは二十二の誕生日を迎えてから二十三になるまで、約三十人の男と寝ました。出会い系サイトで知り合った男たちです。でもわたしはその人たちについて何も話す気はありません。一人目に寝た男が歯医者先生だったとか十六人目がバイだったとか、そんなことをつらつらと言ったところで誰の得にもならないじゃないですか。それよりも、なぜ男と寝ているのか、その理由について話したいと思います。

わたしは男と寝たあと必ずある質問をしているのです。

「どうしてあなたは生きているのでしょうか」

わたし自身、そのように尋ねられたら、きつと上手く答えることはできないでしょう。

わたしという人間は生きている価値のない人間です。

だからと生き続けた二十三年間、生きていて幸せだと実感したことはありません。というのも、あなたの人生をざっくり要約せよ、という題で作文を書くのです。すると、わたしはきつと自分の人生を「つまらない人生」だった、と要約するでしょう。印象深い出来事が何一つありません。そんなわたしの人生は、まさに不幸だったと言い切ってもいいじゃないですか。

だからときどき思うのです。そんな人生、すぐに捨てちゃえばいいのに、って。でもこのように、だからと生き続けてしまいました。そこに明確な理由なんでもありません。

難しい質問でしょう。しかし、わたしは問い続けたいのです。納得できる答えがほしいのです。知らない男と寝るのは肉体的な快楽を求めているというより、この質問をするためと言っても過言ではありません。

でも、ほとんどの男はわたしの期待している答えを言ってくれませんでした。そんなのわからないよ、と苦

笑いを浮かべたり、なんとなく生きてる、なんて退屈な答えを返してくる人が大半です。わたしがほしいのは、そんなありきたりな回答ではありません。だから納得できる答えを獲得するまで、わたしは知らない男と寝ることをやめないでしょう。

つまりわたしには明確な目的があるのです。知らない男と寝ることは悪いことというのが一般論ですが、わたしにはしっかりとした目的があるじゃないですか。それなのに、どうしてわたしは責められなければいけないのでしょうか。

出会い系サイトで知らない男と会って寝ていることを、同性の知人に語ると、たいていは嫌な顔をされます。わたしの知人の中で特に真面目な性格のN子ちゃんは、そういうことは彼氏以外とするもんじゃないね、と、つめたく言い放ちました。

そこでわたしは寝た男の話をN子ちゃんにしました。あれは、二十二歳の九月、十一人目の男のことです。

彼は既に結婚していました。結婚生活三年目。もうす

ぐ二歳になる子どもをそろそろ保育園に入れるべく、専業主婦だった妻が学習塾のアルバイトを始めたそうです。彼の収入だけでも家計をやりくりするのは十分だったのですが、これを機に新しいことに挑戦したいという妻の要望を彼は快く了承したそうです。

彼自身は保険会社に勤めていました。入社四年目、仕事にやっと慣れはじめ、働く喜びを覚えたそうです。仕事に夢中になっていた彼は、妻に目を向ける余裕がなくなっていました。仕事から帰るとすぐに寝てしまい妻の相手をしなかったそうです。また休日も職場で持ち帰った仕事に専念し、家族サービスを疎かにしてしまいました。そのため彼は妻の異変に気がつかなかったのです。

妻が学習塾のアルバイトを始めてから一ヶ月、出張に行くはずだった彼は仕事に関する重要な書類を家に忘れたことに気がつきました。空港から引き返し、いつものように家のドアを開け、玄関に足を踏み入れたとき。気がついたのです。

見慣れない男物の靴が、玄関先に脱ぎ捨てられていま

した。

彼はショックを受けました。結婚から三年目。仕事も順調。やっとこれから、そう思った矢先に裏切られたのですから。妻の不倫の相手は学習塾の正社員だったそうです。不倫相手と妻の行為を目の当たりにしたとき彼は悟りました。不倫なんて小説やテレビドラマの中ではごく当たり前のように起こりますが、実際に当事者になってみないとその悲しみは分からない、と。妻は泣きながら彼に懺悔し、もう二度と不倫をしないことを誓ったそうです。しかしその言葉を信用できるほど彼はお人よしではありませんでした。当たり前ですよ。人の信頼を回復するってそう簡単にできるものじゃないでしょう。

その日から彼は妻と一緒に寝ることを避けはじめました。同時にやり場のないさびしさと、妻に裏切られたことにより募った不信感を、別の誰かにぶつけました。自暴自棄ってやつですね。彼は会社で同期入社した女性と親密な関係になり、ついに一夜を過ごしてしまいます。彼は妻に裏切られ、同じ方法でその裏切りから立ち直ろう

としたのです。

最初は同期の女性との関係をずるずると引きずっていました。しかし同期の女性が彼氏をつくってしまい、さびしさをぶつける相手を失ってしまいました。そんな彼が手つけたもの、それが出会い系サイトでした。そこで、わたしと彼は顔を合わせ、当たり前のように寝たのです。

あなたは空腹を感じたときどうしますか？ お腹がすいたときはご飯を食べればいい。そう思うかもしれませんが。でも周りに食料がなかったらどうしますか。何か別のことをして空腹をまぎらわせようと思いますよね。それと一緒に。彼はさびしかったです。そして苦しかったです。そのやり場のないさびしさや苦しさをただ単にセックスという行為で解消していただけです。結婚しているのだから倫理的に良くないと思うかもしれませんが。でも彼はただ単に解消したいだけなのです。そしてわたしはただ単に質問をしたいただけなのです。お互い目的の過程にセックスという行為があるだけじゃないですか。

その話をN子ちゃんにしました。すると彼女はなんて言ったと思いますか。わたしのことをにらみつけて、あった、最低だよ、汚らわしい、と吐き捨てたのです。知らない男と寝る理由をそこまで正当化させたいの？ そうまでしているんな男と寝たいの？ 最低だわ、ってね。わたしはときどきこう考えるのです。何か目的があるのなら、それでいいじゃないかと。一番よくないのは、人から悪く見られたくないから、と世間の目を気にすることでしょう。ビッチだとか、ヤリマンだとか、そう見られたくないから貞操観念を意識しつづける女の子って、きつと、たくさん、いる。

でも、そういう人ってかわいそうに見えませんか。社会的なイメージに振り回されています。そういう子は周囲の視線ばかり気にしてびくびくおびえながら生きてるんでしょう。そういうのって、ほんとにかわいそう。暇な時間を有効活用したい、という安直な理由から卓球を始めた男の子がいます。モテたいからギターを弾き始めた男の子もいます。暇つぶしに卓球をすること、モ

テたいからギターを弾きはじめること、さびしいからセックスすること、どれも同じじゃないですか。

当然、見知らぬ男と寝ることがいいことなんて思っていないせん。よく考えずに自分の身体を他人に委ねるよりも、慎重になつて相手を見極めるべきです。でも目的があるのなら別です。

それにわたしは自分の身体が大事だなんて思わないのです。

なぜなら、わたしには自傷癖があります。いえ、正確には自殺癖とでも表現すべきなのでしょう。毎日、わたしは自殺をすることで自分の身体を傷つけているんです。だから今更自分の身体を大事にしようなんて思いません。

もちろん、現実の世界で自殺をしてしまったら、わたしの人生は終わってしまします。たった一度しか自殺することができないでしょう。しかし、わたしは何度も自殺することができなのです。あなたもできますよ。夢の世界ならね。

夢の中で自我を保てばいいのです。それは非常に難しいことでしょう。わたしが夢の中で自我を保てるようになったのは小学生のころでした。当時、わたしは施設にいました。家族がいなかったのです。施設暮らしというのは非常に退屈なんですよ。ほこりが宙を舞うせまい室内の中でくらすのはまるで刑務所の生活と同じように思いました。刑務所で生活したことなんて、ありませんけどね。でも、檻があるかないか、たつたそれだけの違いしかないでしょう。そのような閉鎖的な空間の中でなにかしようという気なんて起こりません。そんなわたしを見ていた施設の養護さんが一冊の日記帳を渡してくれました。それがきっかけでした。

日記帳に書くことなんてありませんでした。どうして日記帳なんてくれたのだろう、なんて思いつつせつかくもらったのだから、とわたしの中に眠る吝嗇な根性が押し出されたのか、情性で日記帳をつけ始めました。

退屈な日には「退屈な日でした」と書く。つまらない日は「つまらない日でした」と書く。書いていくうちに、

わたしの毎日はなんてうすっぺらいものなんだろう、とかなしい気持ちになりましたね。

しかし日記を書き始めてからしばらくたつたあと、わたしはすごく印象的な夢を見たんです。それは空を飛ぶ夢でした。そんな非現実的な体験を夢の中ではつきりと自覚したんです。わたしはそのことを日記に書きつづりました。すると翌日、奇妙なことに同じ夢を見たのです。きつとその夢を強く意識したことで、わたしの脳みそが同じ夢を見せてくれたのでしょう。その日から、空飛ぶ夢を見たい一心で、見た夢のことを書きつづりました。

その習慣が成人を過ぎてからも続いたのです。むしろ、夢の日記を書きつづけないと気がすまないのです。まるで薬物中毒のように。習慣つてすごくおそろしいと思いました。

そのころには夢の中で自我を保てるようになっていましたね。わたしは夢の中で「ここは夢の世界だ」とはっきり自覚することができるのです。そして、頭の中で念じること、自分の体を宙に浮かせ、空を飛ぶこともで

きます。わたしの夢の世界ですから、わたしの思い通りになんでもできます。一瞬で高層ビルをつくったり、芸能人を登場させることも容易いことでした。

つい最近知ったのですが、これを専門的な用語で「明晰夢」と言うそうです。睡眠中に見る夢の中で、「夢である」と自分が自覚できる夢のことですよ。そして、明晰夢を見ることのできる方の多くが、見た夢について日記などの記録をしています。無自覚とはいえない見た夢について約十年ほど記録をしていたわたしのことから、明晰夢を見ることができるのは当然のことでしょう。

二十を超えたあたりからわたしは知らない男と寝るようになりました。わたしは求められることが大好きなんです。知らない男でも、わたしのことを求めてくれるって。そう思うと、セックスがやめられないんですね。それにあの質問を聞きたいという目的もありました。でも、ときどきこわくなったり気分が乗らないときがあります。そんなとき、わたしはきまってリストカットをするんです。

手首から流れる血ってとってもあたたかいんですよ。カミソリで手首を切ると、だらりとしたゼリー状の液体が肘へと流れていきます。その光景を見るたびに、わたしは生きている心地がするのです。うすっぺらい人生を歩んでいくわたしでも、ちゃんと赤い血は流れるんです。それって、すごく素敵なことだと思いませんか。

しかしあるとき、わたしは手首を深く切りすぎて倒れてしまいました。血を流しすぎたのです。気がつくとき、見知らぬベッドの上で横になっていました。医者からは自殺未遂と診断され、わたしは気が狂った頭のおかしい奴だと、世間的に認定されてしまいました。その日から、わたしはしばらく病院で療養することを強いられます。もちろん、リストカットもセックスもできません。わたしのベッドの周囲には手首を切れるものなんてありません。病院を脱走しようとも考えましたが、四六時中、看護婦がわたしを監視しているのです。わたしは次第に欲求不満になっていきます。病院にいるほうが、かえって気がおかしくなりそうでした。これじゃあ本末転倒

じゃないですか。そんなとき、わたしはあることを思いついたのです。

わたしには夢の世界があるじゃないですか。

明晰夢の中で、わたしはリストカットをするようになりました。夢の中で性交はできませんね。相手の反応とか仕草とか、そういうのも全部わたしが想像しなきゃいけません。そういうのって興ざめするんです。それよりも、自傷行為が捗りました。いくら手首を切っても死ぬことはありません。だって夢の世界ですから。

わたしは夢の中でカミソリを思い浮かべました。すると手中にはカミソリが握られています。わたしはそのカミソリで手首を切り、あたたかい血が流れることを想像しました。すると、現実の世界で体感した、あの血のぬくもりが、そのまま夢の世界でも感じる事ができるのです。それに夢の世界ですからどんなに血を流しても倒れることはありません。わたしはたくさんの血を流しました。そして同時に、血を流すことに対して快感を覚えたのです。

やがてカミソリで満足できなくなったわたしは、ノコギリで自分の手首を切りました。激しい痛みとともに切断された片腕は熱を帯びはじめます。どばどばと流れる血が生きている心地を与えてくれるのです。それからわたしの自傷癖はどんどんエスカレートしていききました。ノコギリで手首を切っていたわたしは気がつくとお腹や首を切断できるようになりました。当然、現実世界でそれをするとなんか死んでしまいます。しかし夢の中では死ぬことなく代わりに目がさめるだけで済むのです。背中からイヤな汗が噴き出して目覚めはよくないですが、それだけでなんです。

病院から抜け出すことができた今でも、わたしは夢の中で毎晩自殺しています。だから自分の身体を大事にしようなんて今更思いませんよ。わたしには自殺癖があるのですから。

2

続きは製品版で！